

漢国（かんごう）神社

経津主神（ふつぬしのかみ）は、別名、布都御魂神（ふつのみたまのかみ）と呼ばれることもあるが、奈良県の石上（いそのかみ）神宮、千葉県の新田神社、各地の春日神社の神である。経津主神（ふつぬしのかみ）は日本書紀において、建御雷之男神（たけみかずちおのかみ）とともに、葦原中国（あしはらのなかつくに）平定を成し遂げた神とされているが、古事記や旧事本紀では、この神は建御雷之男神と同じ神であるとされている。

千葉県と茨城県の県境付近に、対（つい）をなすように、新田神社と鹿島神宮が建っているが、この新田神社に祭られているのが経津主神、鹿島神宮に祭られているのが建御雷之男神である。この両神は後に奈良の春日大社に勧請され、その後全国の春日神社で祭られるようになった。しかし、経津主神については、元々、奈良の石上神宮に祭られている布都御魂神（ふつのみたまのかみ）と同じ神様であろうと、一般に考えられている。

まず、基本的には、石上神宮（いそのかみじんぐう）に祭られている神が、布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）、或いは布留御魂大神（ふるのみたまのおおかみ）と言われる。この神の名は、剣を「振る」の意味、また剣を振った時に「フッ」という空気を切り裂く音がすることから生まれたものと言われている。古代に朝廷の軍事を統括していた物部一族が祭る重要拠点であり、ここは朝廷の武器庫でもあった。古事記の神武天皇の章によると、神武天皇東征の時、天照大神と高木神が建御雷之男神（たけみかずちおのかみ）に託して神剣を神武天皇に届けさせた。この剣を布都御魂といい、これが石上神宮の御神体となっているのである。

私は、かつて、[物部から鹿島神宮を乗っ取った藤原のことを書いたが](#)、新田神社も事情は同じである。かの有名な梅原猛の「神々の流竄（るざん）」に中臣氏の物部氏勢力の乗っ取りが詳しく書かれているので、是非それを読んで欲しい。梅原猛の「神々の流竄（るざん）」を読めば、紀記において[藤原不比等](#)がどのように歴史を改竄したかが判るであろう。藤原不比等は、天皇家のため、藤原一族のために紀記において歴史を見事に改竄したのである。見事である。余りにも見事であるので、その証拠はなかなか掴めないのであるが、藤原一族の本拠地に明らかな証拠が無造作に転がっていた。漢国（かんごう）神社である。漢国（かんごう）神社は、近鉄奈良駅から歩いて5分のところにある。

念のために言っておきたいのだが、たしかに藤原不比等によって・・・藤原一族の貴族としての確乎たる地位を築く・・・その基盤がつくられはする。神道も、タマ振りの物部神道から禊ぎ払いの中臣神道にその中心は移るのかも知れない。しかし、上に述べたように、物部氏の神・経津主神（ふつぬしのかみ）は藤原氏の神・建御雷之男神（たけみかずちおのかみ）と同格又は同一の扱いであって、依然として物部氏の神・経津主神（ふつぬしのかみ）は健在である。さらに、後述するように、藤原不比等は、出雲の神・大己貴命（おおなむちのみこと）と少彦名命（すくなひこなのみこと）を乗っ取るが、これも又・・・同様に・・・、大和の神・大物主命（おおものぬしのみこと）と同一視されているので、出雲の権威がけっしてなくなった訳ではない。出雲の神・大己貴命（おおなむちのみこと）と少彦名命（すくなひこなのみこと）は依然として健在なのである。天皇家の祖先神・天照大神（あまてらすおおみかみ）や素盞鳴命（すさのおのみこと）は別格神として鎮座しておられるのであり、日本はまさに「やよろずの神」の世界である。藤原不比等が紀記において歴史をどのように改竄したとしても、わが国が怨霊普遍の世界であることは変わらない。さらに言えば、聖武天皇は、藤原一族でありながら、仏教の力によって藤原の行き過ぎを必死で是正されたのであった。聖武天皇は、藤原でありながら、藤原でない。

さあ、それでは、漢国（かんごう）神社に参るとしようか。近鉄の奈良駅から奈良市観光センターの方向に歩いて3分か5分ぐらいのところにある。近鉄奈良駅の前の通りが県庁前の通りであり、それと並行して南側の幹線道路が三条通であるが、奈良観光センターは、近鉄駅の西側の「やすらぎ通り」と三条通の交差点にある。



増尾正子さんが奈良町回顧録をシリーズで書いておられ、その25回目に奈良町の伝説「漢国神社と林神社」というのがあり、[彼女のホームページにも掲載されている](#)。その漢国神社に関する要点は次の通りである。

『「漢国神社」というと、中国からの渡来の神様がお祀りされているような印象を受ける。けれども、この神社の由緒は古く、推古天皇の元年（五九二年）勅命により、大神君白堤が大物主命を、その後、元正天皇の養老元年（七一七年）、藤原不比等が大己貴命と少彦名命を合祀されたという。大物主は大国主命の和御魂、大己貴は荒御魂であるから、御祭神は、天孫降臨の前に、協力して国を治め、呪術、医薬等を教えて人々を慈しまれた三輪系の国津神（地主神）である。』

さて、この漢国神社（かנגうじんじゃ）は、ご祭神は、大物主命（おおものぬしのみこと）大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこなのみこと）をお祀りされている。で、御座の由来は、推古天皇元年2月3日に遡ります。約1400年ほど前のこと。大神君白堤（おおみやのきみしらつつみ）が、詔を賜いて、園神（そのかみ）である大物主命をお祀りした。その後、元正天皇の時代 養老元年11月28日、藤原不比等が、更に、韓神（からかみ）の2座を相殿（あいどの）として、祀ったのが、漢国神社だ。古くは、春日率川坂岡社と称していたそうである。「園神」という言葉と、「韓神」という言葉が出てきたが・・・韓神（からかみ）というのは、大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこなのみこと）の二人を指すらしい。この二人を祀る漢国神社は、平安時代末以降は春日大社の末社として興福寺の支配を受けましたらしい。

漢国神社が春日大社の末社であったことは次の石碑を見ていただければ・・・お判りいただけるかも。



さて、漢国神社で私は何を語ろうとしているのか・・・、そこが問題だが、実は、今私は「空なる天皇」を語ろうとしている。私は、「天皇」は、わが国の「歴史と伝統・文化」の象徴であると主張してきた。そして、わが国の「歴史と伝統・文化」の心髄は、「違いを認める文化」であると主張してきた。河合 隼雄に聞いたら、河合隼雄は、「心髄がないのが心髄だ！」と言っていたが、ひょっとしたらそう言い替えても良いかもしれない。

河合隼雄は、日本神話の構造を「中空均衡構造」だと言っているが、それは多分・・・「空の構造」と言い替えても良いだろう。私は、今、神話でなく、漢国神社という歴史的事実そのものを語ることによって、わが国の「歴史と伝統・文化」の心髄が「空の構造」であることを主張しようとしているのである。

河合隼雄は、「揺りもどしの現象」と呼んでいるが、天皇家の力が強くなりすぎると出雲系の力が示されて均衡に戻る、そして、そのような「揺りもどしをする神」として、大物主神（おおものぬしのかみ）が活躍するのだ・・・と言っている（淡交社の＜日本の古社＞シリーズ・「大神神社」、平成16年2月）。

私は、大物主神（おおものぬしのかみ）を漢国神社の由緒書きにあるように、園神（そのかみ）、つまり大和系の神であると考えて良いと思う。そして、同様に、漢国神社の由緒書きにあるように、大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこなのみこと）は、韓神（からかみ又はからのかみ）であると考えて良いと思う。韓神は出雲系の神である。大物主神（おおものぬしのかみ）と大己貴命（おおなむちのみこと）はけっして同一の神ではない。別の神である。このことは平安京宮内省内で行なわれていた祭りの実態を見ても明らかである。

しかし、紀記及び三輪神社では、大物主神（おおものぬしのかみ）と大己貴命（おおなむちのみこと）は同一の神とされている。大己貴命（おおなむちのみこと）は、明らかに出雲系の神であるので、大物主神（おおものぬしのかみ）と大己貴命（おおなむちのみこと）は同一の神だとすれば、大物主神（おおものぬしのかみ）も河合隼雄が言うように出雲系の神ということになる。これはどういうことか。不思議ではないか。

さて、武蔵の氷川神社は、須佐之男命（すさのおのみこと）と稲田姫命（いなだひめのみこと）と大己貴命（おおなむちのみこと）をお祭してあるれっきとした出雲系の神社である。また、武蔵の国府をお護りする大国魂神社は、須佐之男命（すさのおのみこと）の子である大國魂大神（おおくにたまのおおかみ）をお祭してある。かの有名な八坂神社（祇園神社）も本来祭神は須佐之男命である。

越前、越中、越後は、日本海で結ばれ、当然、出雲系である。武蔵と日本海がどう結ばれるのか・・・、不思議に思われるかも知れないが、実は、荒川と千曲川を通じて武蔵と日本海が結ばれていたようだ。秩父の古刹・慈光寺への道路際にある板碑、これは

13、14世紀のものだが、同様の板碑が能登国大屋荘（現在の輪島市中段町）にもある。荒川上流から千曲川上流にいたる十文字峠越えて運ばれ、千曲川から信濃川をくだって、海上を渡り運ばれたものと思われる。かなりの重量のものが、河川等を利用して本州中部を横断して運ばれたのだ。したがって、出雲系の人びとが武蔵と日本海で繋がっていたと考えれば、信濃は、当然、出雲系・・・ということになる。諏訪神社は、建御名方命（たてみなかたのみこと）と八坂刀売命（やさかとめのみこと）をお祭してあるが、建御名方命（たてみなかたのみこと）は須佐之男命（すさのおのみこと）の第2子であって、諏訪神社はれっきとした出雲系である。

このように、日本海、信濃、関東はすべて出雲系の神であり、出雲系の人びとが多く住んでいたと思われる。だとすれば、天皇家がこれを支配するには、大物主神（おおものぬしのかみ）と大己貴命（おおなむちのみこと）は同一の神である方が都合がいい。これがたて前である。表向き、たて前は守らなければならない。本音は本音として、内々で祭ればいい。藤原不比等はそう考えて、紀記及び三輪神社では、大物主神（おおものぬしのかみ）と大己貴命（おおなむちのみこと）は同一の神とし、漢国神社では、園神である大物主神（おおものぬしのかみ）と韓神である大己貴命（おおなむちのみこと）を峻別して、園韓神祭（そのからかみのまつり）を執り行うことにしたのではなかろうか。なんと長（た）けた思想ではないか。

大和王権は、各地に県（あがた）を設置したときに、その地の豪族の女性と天皇家と婚姻関係を結ぶこととした（三輪山の神々、2003年3月、学生社、p57）。やがてその子孫たちは何の抵抗もなく大物主神（おおものぬしのかみ）と大己貴命（おおなむちのみこと）を同一の神として祭りあげるであろう、藤原不比等はそう考えた。否、こういったやりかたは藤原不比等ならずとも誰もが考えるわが国の流儀であるのかも知れない。

和の極意・・・それは陰陽の和合だ！ 「陰陽の和合」すなわち「空」である。藤原不比等といえどもわが国固有の流儀に従わざるを得なかったのであり、わが国の場合、その基本的な構造が「空」であるが故に、河合隼雄のいう「揺りもどしの現象」（日本の古社「大神神社」、平成16年2月、淡交社、p42）が大事な場面で如何なく発揮される

のである。最大の政治場面・・・、それは律令国家の完成場面であり、中臣神道に対する「揺りもどしの現象」が聖武天皇の盧舎那仏（るしゃなぶつ）すなわち奈良の大仏さんの建立であるが、それは後でゆっくり語るとしよう。今日は、天皇家を象徴する大和系の神・大物主神（おおものぬしのかみ）と・・・もともと天皇家の反対勢力であった出雲系の神・大己貴命（おおなむちのみこと）の話である。わが国の場合、その基本的な構造が「空」であるが故に、大物主神（おおものぬしのかみ）といえば大物主神（おおものぬしのかみ）、大己貴命（おおなむちのみこと）といえば大己貴命（おおなむちのみこと）である。白か黒か、はっきりしないのである。たて前として一体不可分なのであるから、どちらを信ずればいいのかなどとその区別を問題にするのは野暮なのである。これが「両頭截断」であり「流動的知性」である。「空」の思想といっても良い。

さあ、それでは、漢国神社の境内をもういちど・・・ゆっくりお詣り下さい!